中大門遺跡

——明和ゴム工業工場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

1983年

前橋市教育委員会
明和ゴム工業株式会社

序

近年、埋蔵文化財の発掘調査は、量、質ともに増加しております。前橋市においても、宅地開発、土地改良事業、学校開設等に伴い、多くの遺跡が確認され、事前調査により、貴重なデータが次々と集積されております。これは単に行政サイドの問題に止まるものではありません。民間企業の工場増設等も、埋蔵文化財の発見に直結するケースが多いものです。「中大門遺跡」もそのような例の一つであります。同所は明和ゴム工業株式会社前橋工場の拡大に伴い、同会社より市教育委員会が調査依頼を受け、発掘調査を担当しました。同所は市の中央、利根川左岸の台地上に位置し、研究者間では古代の条里制施行地と考えられて来ました。又、「中大門」の地名から、古代の豪族「上毛野氏」の一族である「朝倉君」の氏寺に存在が推定されていました。周囲にも「北大門」「南大門」「堂木」等の字名が残っています。

発掘調査は9月下旬から11月上旬にわたり、古代の水田址と思われる遺構を検出することが出来ました。埋蔵文化財の発掘調査は、単なる思いつきや少数者の力だけで出来るものではありません。周到な計画と多くの関係者の地道な協力があってこそ、達成され得るものであります。本発掘調査を遂行するにあたり、用具や事務所等の提供、作業員の募集を引き受けて下さった明和ゴム工業関係者の方々、重機による掘削を担当して下さった石井鉄工所、群馬砕石の方々、限られた日時の中で、黙々と発掘作業に精出された作業員の方々に厚くお礼を申し上げます。本報告書が地域の歴史の解明と、斯学の発展に些少なりとも寄与する所があれば幸いであります。

昭和59年3月31日

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

例　　言

1．本書は明和ゴム工業株式会社前橋工場の工場増設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．発掘調査期間は昭和58年９月28日から昭和58年11月５日までである。

3．発掘調査の主体は、前橋市教育委員会である。

4．発掘調査は前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係係員の鵤木晋一、岸田治男、前原豊、林喜久夫、江部和彦が担当した。

5．本書の編集、執筆は、鵤木晋一、江部和彦が担当した。図面トレースは主に住谷文彦が行った。

6．協力機関

明和ゴム工業株式会社前橋工場（プレハブ事務所、発掘用具等）

石井鉄工所・群馬砕石（表土掘削）

パリノ・サーヴェイ株式会社（花粉分析）

7．本調査にあたり、特に下記の方々の御教示、助言を頂いた。ここに謝意を表したい。

新井　房夫氏（群馬大学教授）　　地層、土壌等の鑑定

石川正之助氏（県史編纂室）　　水田遺構調査法、条里制の問題点等

8．本調査にあたり、次の方々のご協力を頂いた。

青木　鶴秋	清水正二郎	住谷　文彦	関根　辰雄	森田　博治
秋山　黎子	池尾　君代	石井久里子	石井　利子	遠藤キヌ江
川和生目子	川和　久子	木村あさ子	木村　照代	後藤　照子
小鮒　幸枝	笹岡　計子	須藤あき子	須藤　明子	田中　京子
田中　幸江	千明香根子	塚田　より	角田志津江	角田としみ
角田ひろ子	渡木　秋子	羽鳥　菊江	羽鳥　チエ	羽鳥美知子
町田　房代	宮下けさみ	宮本ケイ子	宮本ひわ子	大和三枝子
湯浅　道子	吉原　君子			

目　　次

序

例　　言

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　周囲の地理的・歴史的環境 …… 1

Ⅲ　調 査 の 方 法 …… 6

Ⅳ　調 査 の 経 過 …… 6

Ⅴ　遺 跡 の 概 要 …… 7

Ⅵ　基 本 土 層 …… 8

Ⅶ　検 出 遺 構 …… 9

(1)　畦　　畔 …… 9

(2)　溝 …… 11

(3)　耕 作 状 遺 構 …… 11

(4)　第２次試掘調査、その結果 …… 13

Ⅷ　出 土 遺 物 …… 14

Ⅸ　花粉分析報告 …… 15

Ⅹ　結語――中大門遺跡発掘調査の成果と問題点 …… 21

I　調査に至る経過

明和ゴム工業株式会社前橋工場では、昭和58年度、六供町910番地他２筆、約1,000m²の土地に、工場の拡張、増設を計画した。当地は利根川左岸、前橋台地上の中央に位置する。近くには、古代条里制施行の名残と思われる「市之坪」（「一ノ坪」の転か）、寺院の存在を連想させる「京安寺」「北大門」「南大門」等の字名がある。又、北東約500mの所には八幡宮が鎮座し、その東方からは道路建設の際、多数の土器類が出土したと伝えられる。以上のような事例から、当地は遺跡包蔵地として注目されており、市としても文化財保護の立場から、同地内における土木工事等に際しては、十分注意するよう指導していた。当地が遺跡地として確認され、本格的な発掘調査に至るまでの経過は、以下のようである。

昭和58年８月15日　前建指㈹により、宅地開発事前協議に対する意見書の提出方についての依頼がある。

８月24日　当地及びその付近の表面調査を実施する。

８月31日　明和ゴム工業株式会社側と試掘調査等について協議する。

９月３日～５日　文化財保護係係員による試掘調査を行う。（建物建設部分の敷地に幅２m のトレンチを、南北に平行して３本入れる。深さ約１m。）浅間山Ｂ軽石層（1108年噴出）直下に、水田の畦畔と思われるものを検出する。

９月13日　明和ゴム工業株式会社より調査依頼がある。

９月24日　会社側と埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結ぶ。

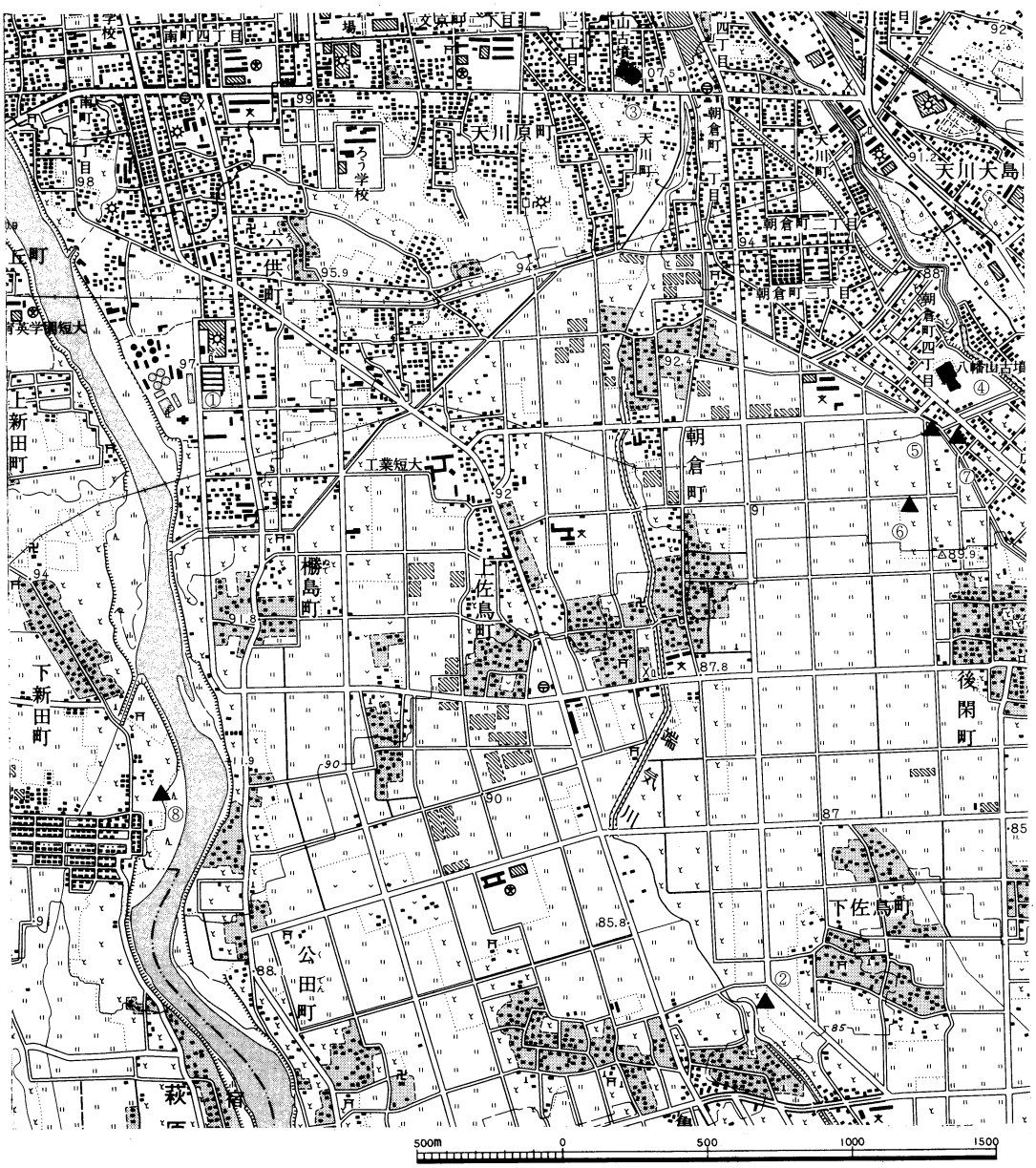
９月27日　遺跡の性格、調査方法等に関する事前説明会を開く。

９月28日　発掘用具等を搬入。表土掘削を開始し、調査に着手する。

II　周囲の地理的・歴史的環境

中大門遺跡は、前橋市六供町910番地他二筆にあり、周辺には、前橋市清掃工場、下水処理場をはじめ、工場や住宅が密集している。当地もまた、明和ゴム株式会社の工場予定地であり、発掘調査時までは、軽石が敷きつめられ、整地されていた。

本遺跡地周辺を地形的、地質的に概観すると、本遺跡地は、前橋市の南部及び西部を、北西から南東に広がる前橋台地のほぼ中央、利根川左岸に位置し、標高約96mの平坦な土地である。前橋台地は周知の通り、火山泥流堆積物とそれを被覆する水成ローム層から成り立つ洪積台地で、東は広瀬川低地帯と直線的な崖で画され、西は榛名山麓の扇状地へと続いている。現在、利根川は、本遺跡地のすぐ西を流れているが、かつては、広瀬川低地帯を流れていたと考えられており、利根川左岸と右岸の前橋台地は、地質的には同質と考えられる。前橋台地の地質を概略すると上部



①中大門遺跡
②川曲遺跡
③天川二子山古墳
④八幡山古墳
⑤後閑団地遺跡
⑥後閑Ⅱ遺跡
⑦坊山遺跡
⑧下新田遺跡

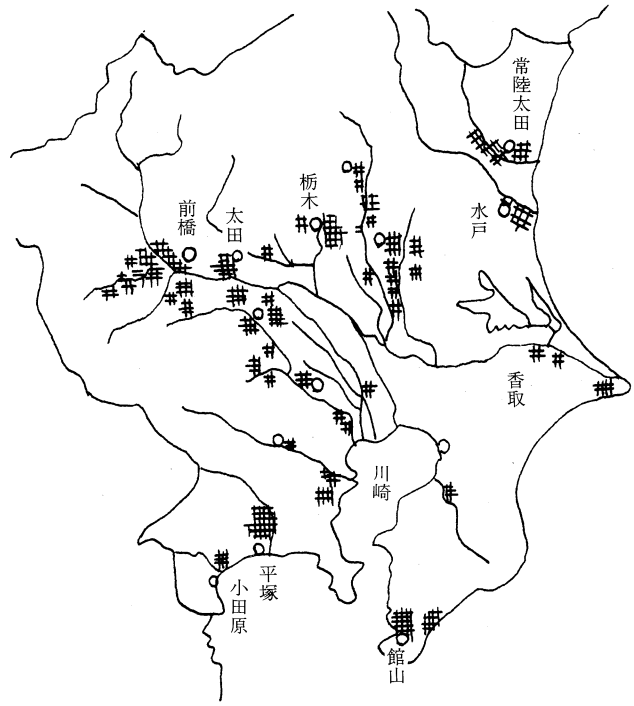
遺跡位置図

（国土地理院２万５千分の１「前橋」を使用）

から、表土、水成上部ローム層（泥炭質層・火山灰質シルト層・軽石層等を含めた）、前橋泥流堆積物層、さらにその下には厚く前橋砂礫層が続いている。中大門遺跡周辺の地層をみても各層の堆積に差はあるものの、ほぼ同様な土層である。水成上部ローム層の下層、前橋泥炭層はその堆積年代をC^{14}で測定してみると13140年前と推定され、さらに、同層の花粉分析によれば、当時は、現在の標高1,000～1,500mの地域に広がる落葉広葉樹林帯の森林構成に類似した土地だとされ、寒冷な気候であったと推定される。[註1]

次に、本遺跡地周辺の歴史的環境について概観していくことにする。先土器時代から縄文時代にかけては、前述のごとく、低湿な地形と寒冷な気候から、人々が生活するのには適さなかった土地と思われ、その時代の人々の痕跡は見られない。弥生時代に入ると、後閑町の広瀬団地付近で宅地造成中に「樽式土器」の甕棺が出土し、六供町や下川淵地区では同時代の土器片が数個発見されているに過ぎない。[註2] また、隣接する高崎市においては、日高遺跡[註3]をはじめとして、浅間C軽石下の弥生水田址が各地[註4]で検出されている。

古墳時代の遺跡では、まず天神山古墳、八幡山古墳をはじめとする大きな古墳をみることができる。かつては、広瀬古墳群として、約170基の古墳を数え、市内でも有数な一大古墳群を呈していたが、昭和初期からの開墾、開発等により、大半は未調査のまま平夷されてしまい、現在、残された古墳から、その古墳群の全容の一端をうかがうことができる。天神山古墳、八幡山古墳は、初期的様相を示す古墳で、八幡山古墳は全長130m、後方部巾72m、前方部巾59m、後方部高さ12m、前方部高さ8mの前方後方墳で、方形平面の各対角線が、ほぼ東西南北の方向にあたり、二段築成の墳丘を持つ。周堀調査の結果によれば、周堀は、深さ0.5m、幅は墳丘北側で26.7m、西側で35mとなり、



関東地方の条里分布（三友国五郎氏による）
――「歴史がつくった景観」より――

ほぼ葺石の根石から30m前後であり、全体の平面規模は墳丘を中心として東西125m、南北180mの方形と推定される。主体部は竪穴式石室と思われ、長さ数mの玉石敷きの部分や粘土を詰めた箇所もあり、出土品もあったと伝えられるが、未だ、未調査のままである。天神山古墳は墳丘の全長129m、後円部径75m、前方部巾68m、後円部高さ９m、前方部高さ７mの長大なもので、墳丘は三段に築かれ、墳頂には直径25mにわたって拳大の転石が施され、赤色顔料によって塗彩された底部に穿孔がある複口縁の壺形土器（石田川期）が配置されていた。周堀の深さは0.6m、幅は46mを超す。埋葬主体部の施設は、内法長辺7.8m、短辺1.4m、高さ１m前後の巨大な粘土槨であり、副葬品として、白銅鏡、銅鏡、銅鏃、碧玉製紡錘車、素環頭太刀、鉄製品等15品目が出土した。また、墳丘の基底部には浅間噴出のＣ軽石が検出されたことから古墳時代初期の前方後円墳とされる。また、この古墳群の多くは、主体部に榛名山二ツ岳から噴出した角閃石安山岩を使用していることが知られ、年代決定の重要な鍵をにぎる[註5]、そして、この古墳群が形成された背景には、有力な豪族とそれを支えた人々の存在が想起される。

後閑団地遺跡[註6]では、古墳前期（石田川期）の住居跡５軒、石槨墓が検出され、川曲遺跡[註7]では、古墳後期（鬼高期）の住居跡が検出され、後閑II遺跡[註8]でも古墳後期（鬼高期）と思われる住居跡や、トレンチ内から石田川土器を検出している。また、坊山遺跡[註9]では、古墳後期（鬼高III期）の住居跡やＦＡに覆われた溝が検出され、下新田遺跡[註10]でも鬼高期の住居跡が確認されている。水田址では、隣接する高崎市新保遺跡[註11]では、ＦＡ下の水田址が報告されている。

奈良・平安時代の遺跡については、後閑団地遺跡、後閑II遺跡で、真間、国分期の住居跡や掘立柱建築遺構が検出され、水田址については、前箱田遺跡[註12]で、浅間Ｂ軽石下の水田址が検出され、畦畔16本と一区画水田の範囲が確認できた。範囲が確認された水田は４面で、形状はすべて長方形、最小約23㎡、最大176㎡であった。また、水田址に伴い、耕作状遺構も検出されており、踏鋤による土起こしが行われた可能性が強い。畦畔はすべて東西方向か南北方向のいずれかで、南北畦畔の方向は、ほぼ真北であり、水田の形状も長方形で、給水の方法は、高位の水田から低位の水田に水をかけ流していく方法がとられたと考えられ、条里制に基く水田である可能性がかなり高いと報告されている。前述の後閑II遺跡においても、Ｂ軽石下から溝や畦と思われる高まり部分が検出され、水田址である可能性がある[註13]。しかも、本遺跡地は、上野国府と推定される元総社から南東へ約４㎞の地であり、本遺跡地の北、南町には、市之坪、一町田という地名が残り、南の公田町には三公田[註14]という地名が残されており、周辺には、律令制（条里制）に係わる水田址が存在する可能性がある。

また、六供町には、南京安寺、中京安寺、北大門、そして中大門[註15]と、寺院に係わる地名が残されており、寺院関係の遺跡が存在する可能性も残されている。

以上、概観にしてきたように、本遺跡地は、弥生時代から、奈良・平安時代にかけての遺構の存在が予想される。

註１　「前橋市史」第一巻　第一編　第二章　地形・地質　参照
註２　「前橋市史」第一巻　第二編　第一章　古代人の生活
註３　「日高遺跡」（群馬県教育委員会、昭和52年度）
註４　「熊野堂遺跡」（群馬県教育委員会）、「芦田貝戸遺跡」「小八木遺跡」「御布呂遺跡」（高崎市教育委員会）等で浅間Ｃ軽石下の水田址が確認されている。
註５　「前橋市史」第一巻　第二編　第二章　豪族の支配と古墳の築造
註６　「後閑団地遺跡」（1982　前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
註７　「川曲遺跡」（群馬県教育委員会　昭和57年度）
註８　「後閑Ⅱ遺跡」（昭和58年度　前橋市教育委員会）
註９　「坊山遺跡」（昭和58年度　前橋市教育委員会）
註10　「下新田遺跡」（1979年　群馬県教育委員会）
註11　「新保遺跡」（昭和53年度　群馬県教育委員会）
註12　「前箱田遺跡」（昭和57年度　前橋市教育委員会）
註13　現在、担当者間で検討、協議されている。詳しくは「後閑Ⅱ遺跡」を参照されたい。
註14　公田は、田令公田条によれば、口分田等給与された土地の残りの田で乗田とも呼ばれ、口分田班給田操作のための予備田であるとともに、その経営は国司が管理し、賃租田とされている。

調　査　地　全　景

Ⅲ 調査の方法

調査地の北西隅に座標原点を設定して、全体を4m単位のメッシュで覆い、20mごとに基準杭を打った。主軸はY軸を磁北方向にとり、その直交方向をX軸とし、メッシュの単位は、X軸を1・2・3……、Y軸をA・B・C……と表記した。

調査は試掘の際、浅間山B軽石直下で検出された畦畔を基準として、工場建設予定地部分を全面的に掘り広げる方法を取った。掘削はB軽石直上まではバックフォーによって行い、その後の軽石除去と遺構の検出は、手作業による精査を採用した。

浅間山B軽石面下の遺構の調査終了後は、更にバックフォーによって、榛名山FA軽石下、浅間山C軽石下の遺構の有無を確認した。つまり、テフラを基準として、順次、地表を剝がすという方法により、調査を進めた。

なお、図面は基本土層図、地層断面図、基線下断面図、耕作状遺構平面図は縮尺1/20で作成した。又、遺構全体図は、関越測量株式会社に作成を委託した。(縮尺1/40)

Ⅳ 調査の経過

以下、調査日誌から抄録する。

9月28日(水)　調査開始に伴う引っ越しを行う。重機による表土掘削を開始する。

9月30日(金)　基準杭を打ち、グリッドを設定する。B軽石を除去し、水田面の精査を開始する。

10月3日(月)　調査グリッド設定図を作成する。水田遺構の検出作業を続行し、畦畔を精査する。

10月13日(木)　関越測量株式会社関係者、来訪する。

10月14日(金)　ハイライダーによる調査区の遺構、及び、全体の写真撮影を行う。県史編纂室の石川正之助氏来訪する。

10月15日(土)　調査区遺構全体の平面実測が開始される。ポイント部分の地層断面図を作成する。

10月18日(火)　調査区基線下断面図を作成する。群馬大学教授新井房夫氏来訪する。調査地内の土質、軽石等の鑑定を依頼する。

10月20日(木)　耕作状遺構の実測を行う。

10月26日(水)　第2次試掘作業を行い、トレンチ内を精査する。

10月27日(木)　基本土層の実測、写真撮影を行う。

11月2日(水)　耕作状遺構の石膏による型取りを行う。

11月5日(土)　調査を終了する。

(調査期間中、湧水対策として、ポンプによる汲み上げを続行した。)

V 遺跡の概要

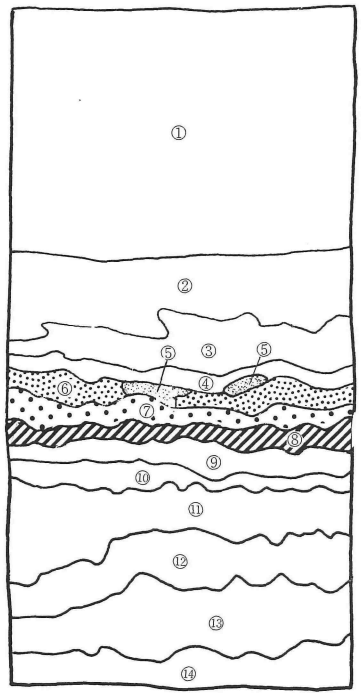
本遺跡は利根川左岸、前橋台地上の中央に位置する。地形的にはきわめて緩やかな平坦地であり、遺跡地の標高は、95.50～95.60m前後である。以前は水田だったが、昭和30年代、区画整理による土地の改変があり、更に数年前には、F・P軽石の大量投入が行われ、平坦化された。

本調査で検出された遺構は、「水田址」に関するものであった。浅間山噴火に伴うB軽石の堆積は、当初から予想されていたが、9月3日の試掘によって最終的に確認された。遺構はB軽石下に埋没しており、1108年（天仁元年）の浅間山の噴火と、それに伴う火山灰や軽石の降下がいかに大きかったかが察せられる。水田址は畦畔状遺構によって区切られていたが、調査面積が1000㎡ほどであり、一区画の確定的な水田面積を算出するまでには至らなかった。溝は調査地を斜めに横切るような形で検出された。又、全域に亙り、扇形状のピットが多数検出された。その形態と機能については、議論の分れる所であるが、本報告書では「耕作状遺構」と呼称しておく。

なお、出土遺物は土師器片、須恵器片が十数点あるが、埋土の状態や出土状況から推して、本遺構に結び付く確証は得られないと思われる。

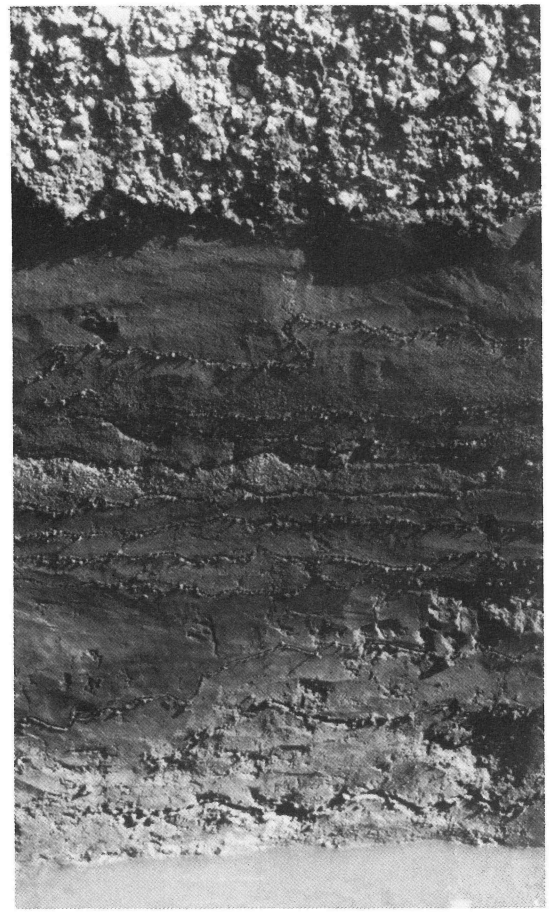
作業風景

Ⅵ 基 本 土 層



地層断面図

L. =95.20



①F・Pの客土層。

②褐色土層。攪乱土層。やや砂質を帯びる。

③黄褐色土層。砂質を帯びるが、やや粘土性もある。

④茶褐色土層。多量のB軽石を含む。(B軽石は1108年、天仁元年降下と考えられる浅間山の火山灰）砂質を帯びる。所所に鉄分の凝集が見られる。

⑤黒紫色土層。B軽石の純層。

⑥茶褐色土層。B軽石層。砂質を帯び、④層よりやや粗い。所所に鉄分の凝集が見られる。

⑦黒灰色土層。B軽石層。砂質を帯びる。脆い。

⑧黒色土層。水田遺構面。粘性に富む。

⑨黒褐色土層。多量のF・P、F・A、C軽石を含む。粘性を帯びる。

⑩黒褐色土層。多量のC軽石を含む。やや砂質を帯びる。

⑪黒色土層。少量のC軽石を含む。重粘土の泥炭質層で、粘性に富む。腐植土と考えられる。

⑫灰色土層。粘性に富む。柔らかい。

⑬黄褐色土層。粘性に富む。柔らかい。

⑭黄灰色土層。粘性に富む。柔らかい。

Ⅶ 検 出 遺 構

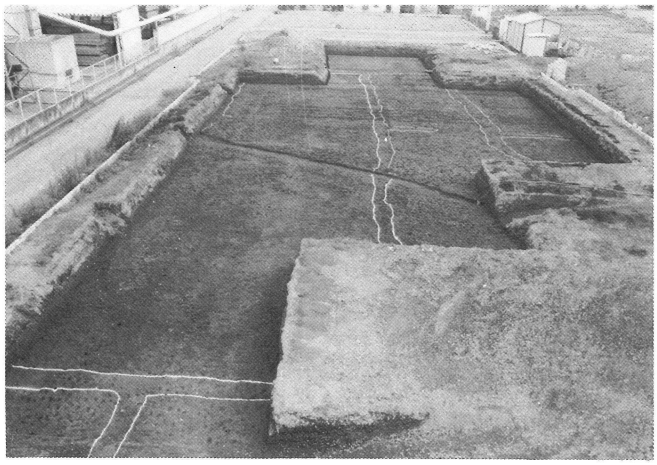
(1) 畦　　畔

畦畔計測値

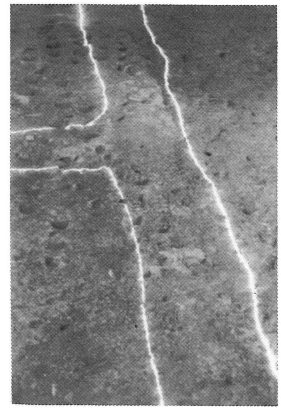
畦畔No.	長さ(m)	幅(cm) 上	幅(cm) 下	高さ(cm)	高さ(cm)	方向	備考
1	2.40	40	56	N 7	S 3	N－ 87° －W	
2	3.68	56	72	W 3	E 10	N－180°－W	
3	3.20	40	72	W 1	E 8	N－177°－W	
4	——	——	——	——	——	N－ 69° －W	
5	0.64	96	112	——	E 2	N－180°－W	
6	10.80	——	——	——	S 4	N－ 92.5° －W	
7	9.20	56	96	N 3	S 4	N－ 92° －W	
8	8.00	72	96	N 3	S 3	N－ 87° －W	
9	3.20	64	80	W 2	E 2	N－177°－W	
10	17.60	48	80	N 2	S 2	N－ 93° －W	
11	2.88	160	184	W 4	E 5	N－180°－W	
12	5.60	48	72	W 2	E 2	N－185°－W	
13	12.64	72	112	N 3	S 6	N－ 94.5° －W	
14	4.64	40	72	W 2	E 3	N－177°－W	
15	7.68	72	104	N 1	S 3	N－109°－W	やや湾曲するため、両端の中点を結んで、計測した。
16	4.00	72	80	W 1	E 1	N－185.5°－W	
17	2.32	——	——	——	E 2	N－ 28° －W	

調査区内で検出された畦畔は、計17本、計測値は上の表の通りである。畦畔はすべてＢ軽石層下から検出された。畦畔の大きさは、幅約92cm、水田面からの比高約3.2cmで、各畦畔とも大きな違いは見られなかった。畦畔が途中で消滅しているのもあるが、多分、土砂等の圧力によるものであろう。方位を見ても、東西、南北各畦畔はほぼ直交している。

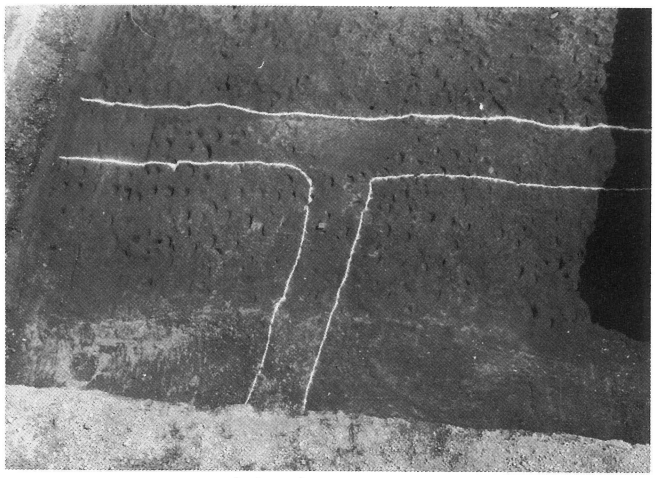
本調査地内で検出された一区画の水田は、Ⓐだけである。他の水田区画は、畦畔が区外へ伸びるため、正確な範囲は認定出来なかった。水田の形状は長方形で、東西を長軸とし、面積は約190㎡。水田面の標高は、調査地北側で約95.65m、南側で約95.56mである。南北の長さ約24m、北高差９cmであるから、南北の勾配は約$\frac{1}{300}$であり、極めて緩傾斜であることがわかる。給水については、用水路や水口が検出出来なかったため、明らかではない。ただ、本遺跡地は地質的に見て、低湿地であり、湧水が多量のため、耕作に必要な水の供給には事欠かなかったものと思われる。



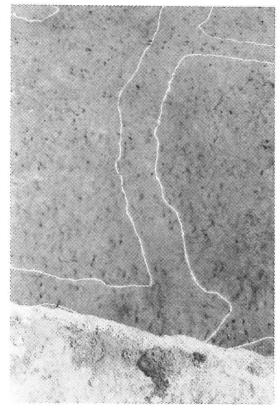
畦畔検出状況　全体



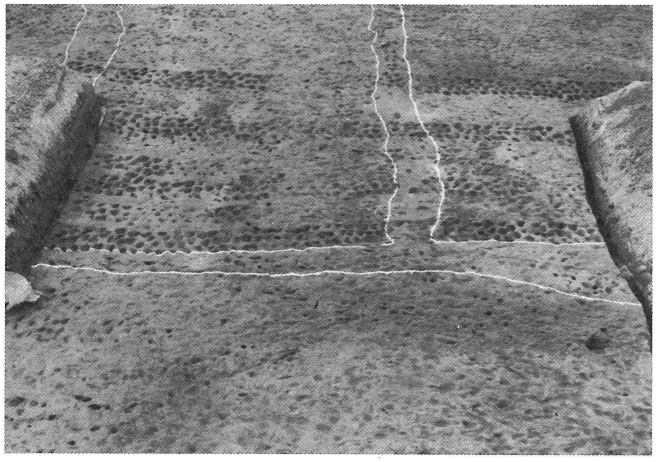
畦畔部分



畦畔検出状況　部分



畦畔部分



畦畔検出状況　部分

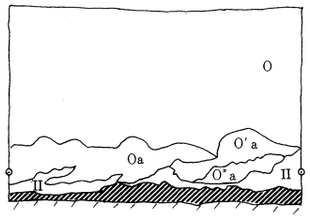
畦畔、遺物出土状況

調査区遺構全体図

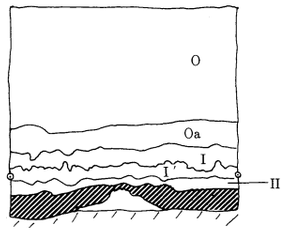
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
A
B
C
D
E
F
G
H
No.1
No.2
No.3
No.4
No.5
No.6
No.7
No.8
No.9
No.10
No.11
No.12
B 9
B 13
C 4
E 7
F 9
G 9
G 15
H 13
溝
耕作状遺構5
耕作状遺構4
95.70
95.65
95.60
95.55
S＝1：160
0
4
8 m

調査区地層断面図

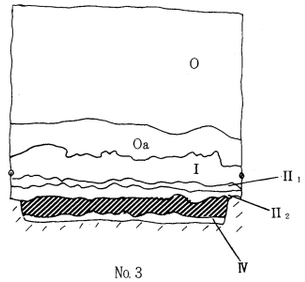
L.＝95.80



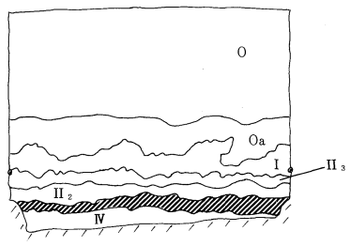
No. 1



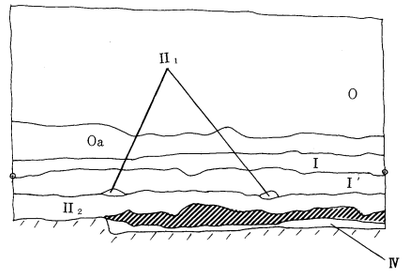
No. 2



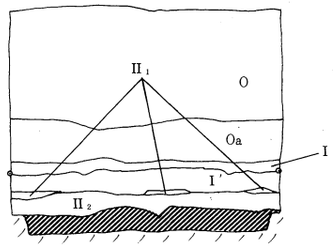
No. 3



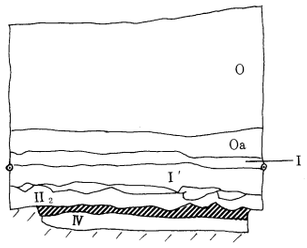
No. 4



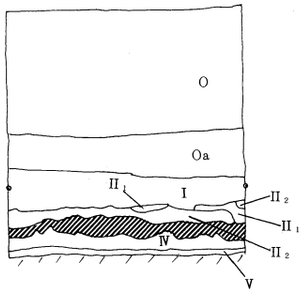
No. 5



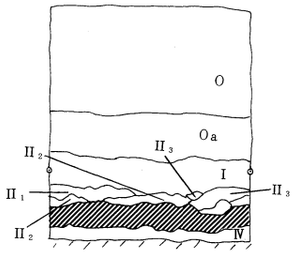
No. 6



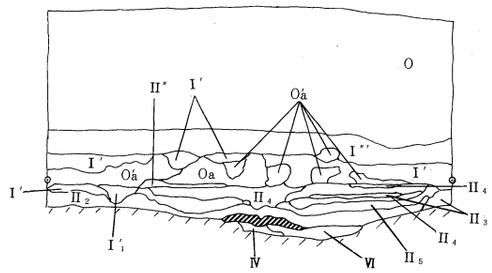
No. 7



No. 8

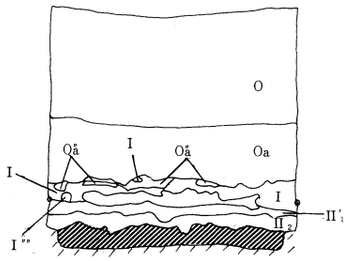


No. 9

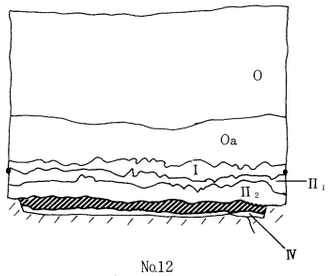


No.10（溝断面）

水田土壌（III層）



No.11



No.12

O	客土	II₁	B軽石　灰含む
Oa	暗褐色土層	II₂	B軽石
Oå	Oa より明るい層	II'₁	B軽石　II₂より黒い
Oå	Oa よりやや暗い層	II₃	明茶褐色土層　B軽石、鉄分含む
I	明茶褐色土層	II₄	B軽石　黒っぽい
I'	Iより明るい明茶褐色土層 多量の軽石含む	II₅	B軽石　やや灰白色
II*	Iよりやや暗い	II₆	B軽石
I*'	Iより暗く、多量の軽石含む	III	黒色土層（水田面）
I*'	軽石含まず	IV	褐色土層　粘性あり、FP. C 含む
		V	砂質性　黒褐色土層
		VI	砂質性　茶褐色土層

0　1　2 m

基線下断面図

〔B 9 ～F 9〕

L. =95.80

〔B13～H13〕

L. =95.80

〔C 4 ～C15〕

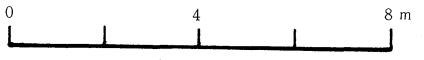
L. =95.80

〔E 7 ～E19〕

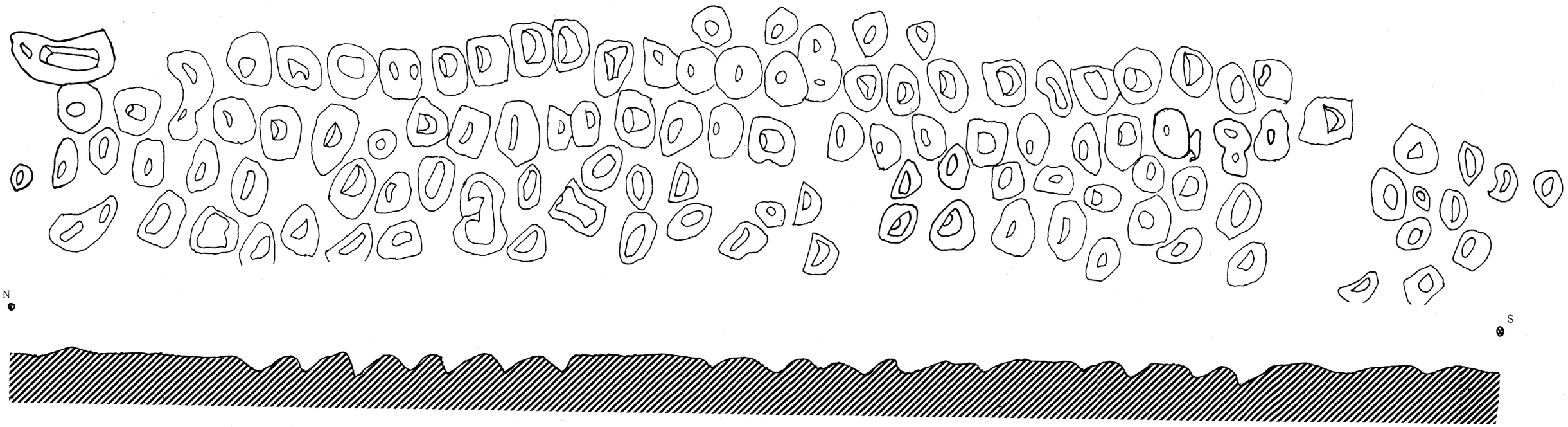
L. =95.80

〔G 9 ～G15〕

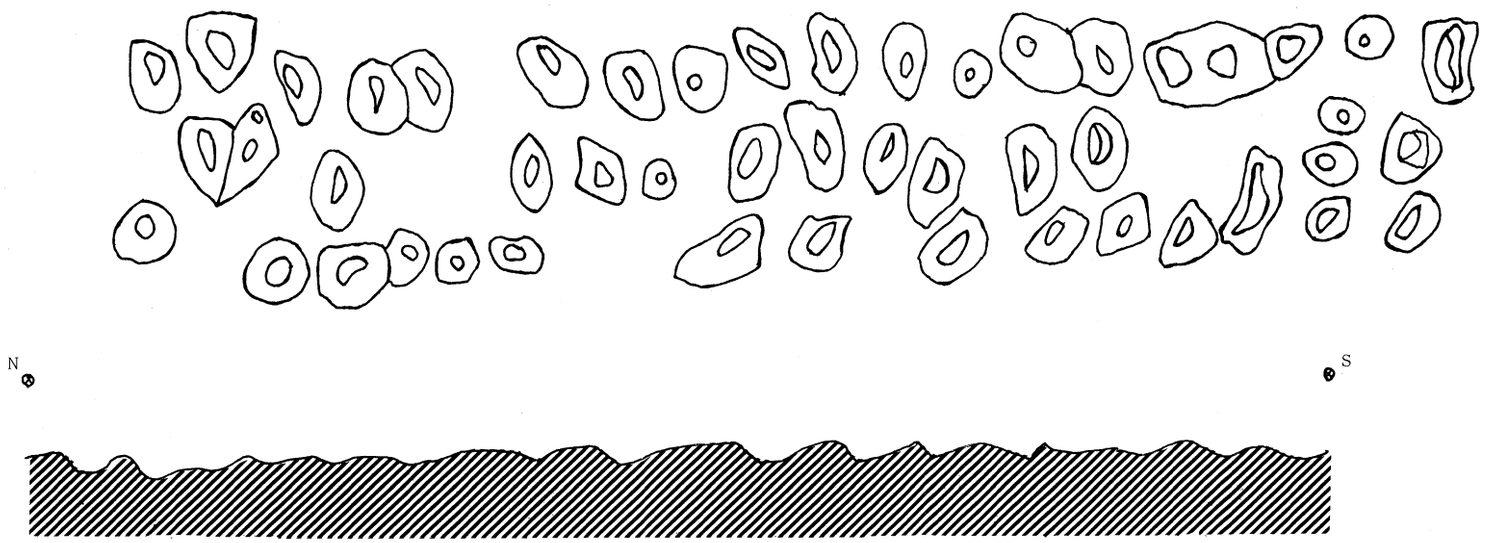
L. =95.80

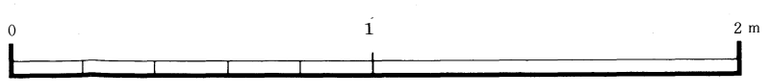


耕作状遺構No.6 平面図及び基線下断面図



耕作状遺構No.5 平面図及び基線下断面図





(2) 溝

調査地中央やや西寄りの所から「溝」が一条検出された。限定された調査地のため、全貌は確定出来なかったが、北北東から南南西にかけて、横切るような形で存在していた。溝は平たいU字形を呈し、直上には砂質を帯びた黒褐色土層があり、その上はB軽石層によって埋まっていた。

規模は、長さ約18.40m(調査地内での長さ)、上幅約48～96cm、下幅約24～56cm、深さ約7～19cmである。底レベルは北で95.51m、中間で95.45m、南で95.42mであり、傾斜は極めて緩やかであるが、水流は南へ向かったものと考えられる。

他の遺構同様、浅間山B軽石によって完全に埋まっていた状態から、灌漑用の溝との推論も成り立つが、方向性や畦畔を切っている状況等を考えると、時期的に差があるように考えられる。溝と他の遺構との関係は不明である。

(3) 耕作状遺構

調査地全域に亙り、多数の小ピットが検出された。このピットに関しては、人間の足跡、畜類の足跡、農具痕等の議論があるが、ここでは「耕作状遺構」と総称したい。前橋市内においても「前箱田遺跡」(前箱田町396番地他47筆、昭和57年発掘調査)で、類似する遺構が調査されている。本遺跡の遺構も、おそらく農具による耕作の痕であろう。特に中央東寄りの所には、南北に数列平行して走っている。耕作状遺構の典型的な例と考えられるので、それをもとに考察を進めてみよう。(調査区全体図№1～№5参照)

遺構はいずれも浅間山B軽石を多量に含む、砂壌土層の下から検出された。形状は扇形あるいは楕円状のものが多く、一端は緩やかに、もう一端は垂直に近いような感じで切られている。地面を抉ったような感じが強い。断面の形は、南北に鋸歯状に連続している。大きさはまちまちで一定していないが、約25×15cm前後、最深部約10cm前後である。

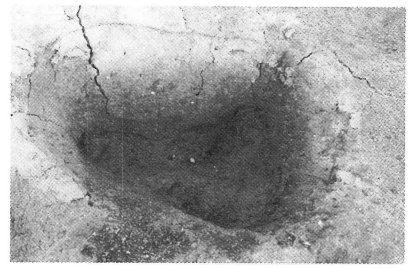
ところで、これらのピットが農具痕ならば、どんな種類の農具による耕作が行われたのであろうか。飯沼二郎氏によれば、紀元前3世紀頃、日本に伝来した稲作は、犁を持たず、掘棒と鍬による常湛法であった、と言う。(「風土と歴史」岩波書店、1970年)「常湛法」とは、播種から収穫まで、耕地に常に水を深く湛えて、除草の煩をはぶく農法、という。(前掲書)本遺跡地は土壌や地質の鑑定の結果、湿地だったと考えられるので、上記の耕作法に類似する方法が採られたのではあるまいか。後述する花粉分析の結果報告も、粗放的な水田耕作の存在を示唆している。

溝

耕作状遺構

耕作状遺構部分拡大

同　左



同　左

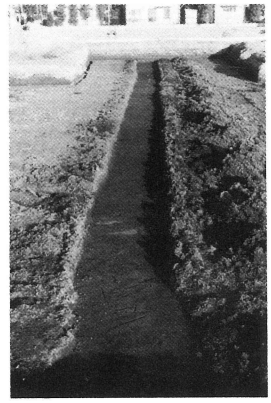
耕作状遺構精査風景

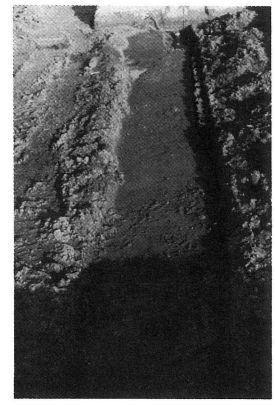
同　左

(4)　第２次試掘調査、その結果

前述の第１次発掘調査終了後、10月26日、第２次試掘作業を行った。幅約２mの東西トレンチを３本設定し、基本土層の層位を指標に、掘り広げた。底には黒色の粘性を帯びた、泥炭質層が広がっており、確たる遺構は存在しなかった。土中には、植物痕と思われる、細くて、狭いＶ字形の刻印が多数残存していた。当時の植生を考えると、葦や茅等が群生する低湿地だったと推定される。遺物は土師器の小片が数点散在していたが、いずれも水で洗われたらしく、白茶けていた。

第１トレンチ


第２トレンチ


第３トレンチ

植物痕（１トレンチ）

植物痕（２トレンチ）

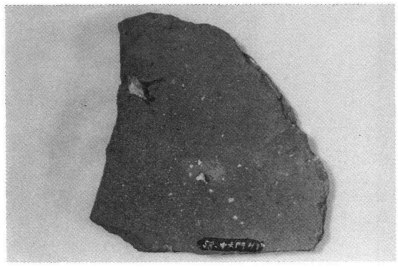
植物痕（３トレンチ）

Ⅷ 出 土 遺 物

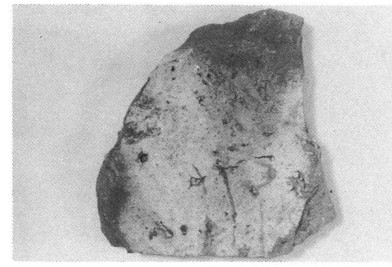
本遺跡地からは、土師器片、須恵器片が十数点出土しただけであった。いずれも埋土中か、耕作状遺構からの出土であり、水で洗われたらしく、白茶けていた。以下、主なものについての概略を記す。

(1)須恵器片　半径約９cmの扇形状破片。青灰色。厚さ1.7cm。焼成良好で緻密だが、胎土に小礫を含む。(図１、２)

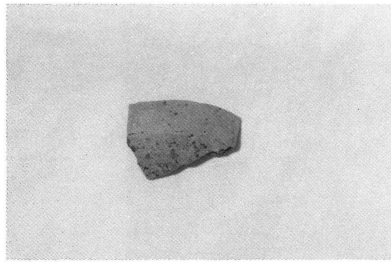
(2)土師器片。大きさ約５×3.5cm。色調は明褐色。焼成良好。坏の一部と思われる。(図３)



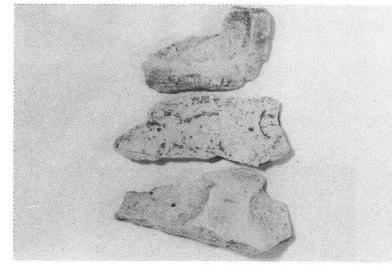
1



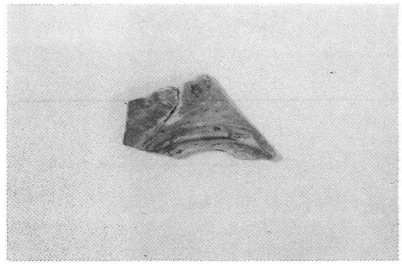
2



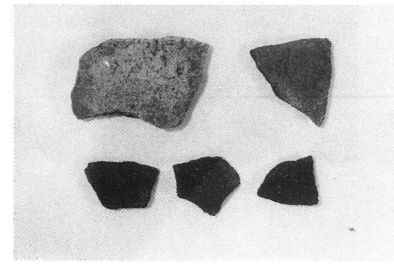
3



4



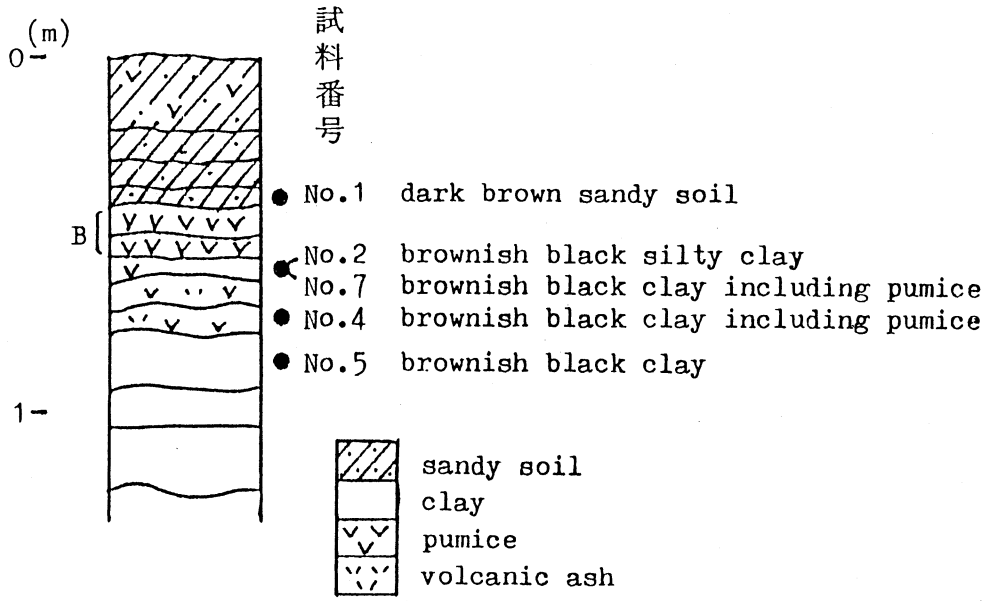
5



6

IX　花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社



試料採取地点土層柱状図

1　試　　料

試料は浅間B軽石の上・下部層より5点採取された。それらの層準及び岩質を図1に示す。浅間B軽石直下（№2と№7）は2地点で採取され約40m離れている。

2　分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料20g（湿重）を秤量し、48%HF→重液分離（$ZnBr_2$）→アセトリシス処理→10%KOHの順に物理・化学処理を行なった。残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

3　分析結果及び考察

分析結果は表1に出現した分類群とその個体数を示した。主要花粉・胞子化石については、樹木花粉総数を基数として百分率を算出し、花粉ダイアグラムとして示した(図2)。図表中ハイフォンで結んだ分類群は分類群間の区別が不明確なものである。また、主要花粉・胞子化石の写真図版（図版1、2）を添付したので参照されたい。

今回の分析で検出された花粉・胞子化石は次のものである。

《AP－1（針葉樹花粉)》

Abies(モミ属)、Tsuga(ツガ属)、Pinus(マツ属)、Sciadopitys(コウヤマキ属)、Cryptomeria(スギ属)、T.C.T.(Taxaceae・イチイ科、Cupressaceae・ヒノキ科、Taxodiaceae・スギ科、この3科の中の何れかではあるが判別の困難なもの)

《AP—2(広葉樹花粉)》

Salix(ヤナギ属)、Pterocarya(サワグルミ属)、Juglans(クルミ属)、Carpinus(クマシデ属)、Ostrga(アサダ属)、Corylus(ハシバミ属)、Betula(カバノキ属)、Alnus(ハンノキ属)、Fagus(ブナ属)、Quercus subgen・Lepidobalanus(コナラ属・コナラ亜属)、Quercus subgen・Cyclobalanopsis(コナラ属・アカガシ亜属)、Castanea(クリ属)、Castanopsis(クリカシ属)、Ulmus(ニレ属)、Zelkora(ケヤキ属)、Celtis(エノキ属)、Aphananthe(ムクノキ属)、Moraceae(クワ科)、Acer(カエデ属)、Aesculus(トチノキ属)、Vitis(ブドウ属)、Elaeagnus(グミ属)、Araliaceae(ウコギ科)

《NAP(草本花粉)》

Typha(ガマ属)、Sagittaria(オモダカ属)、Gramineae(イネ科)、Cyperaceae(カヤツリグサ科)、Polygonum sect. Persicaria(タデ属サナエタデ節)、Fagopyrum(ソバ属)、Chenopodiaceae(アカザ科)、Caryophyllaceae(ナデシコ科)、Thalictrum(カラマツソウ属)、Ranunculaceae(キンポウゲ科)、Cruciferae(アブラナ科)、Rosaceae(バラ科)、Leguminosae(マメ科)、Geranium(フウロソウ属)、Euphorbia(ドウダイグサ属)、Lithrum(ミソハギ属)、Haloragis(アリノトウグサ属)、Umbelliferae(セリ科)、Calystegia(ヒルガオ属)、Galium(ヤエムグラ属)、Rubia(アカネ属)、Artemisia(ヨモギ属)、Carduoideae(キク亜科) Cichorioideae(タンポポ亜科)

《FP(形態分類花粉)》

Trizonoporate pollen(三孔型花粉)

Trizonocolpate pollen(三溝型花粉)

Trizonocolporate pollen(三溝孔型花粉)

《FS(シダ類胞子)》

Lycopodium(ヒカゲノカズラ属)、Polypodiaceae(ウラボシ科)

Monolete spore(単条溝型胞子)

Trilete spore(三条溝型胞子)

《その他微化石》

Pseudoschizaea(淡水生藻類)

No.5ではシダ類胞子が高率に出現する。他にヨモギ属が比較的多く、樹木花粉、イネ科は少ない。No.4、2、1及びNo.7ではコナラ亜属が優先する。他に暖温帯林の主要素のアカガシ亜属が比較的高率に、クリカシ属が僅かではあるが出現する。草本花粉・シダ類胞子は全体で80%前後

と大半を占める。ヨモギ属が著しく高率に出現、次いでイネ科、単条溝型胞子、カヤツリグサ科が高率に出現する。ヨモギ属は特に浅間B軽石下の水田面とされる堆積物に著しく多い。

周辺の植生は、ナラ類に暖温帯要素のカシ、シイ各類を交えた広葉樹が生育していたものと考えられる。

浅間B軽石下の水田面とされる№2、7では、両試料とも比較的良く似た花粉構成を示す。また、特徴的にソバ属が出現する。イネ科は100%前後で出現し、ヨモギ属も著しく多い。カヤツリグサ科を除いては、いわゆる水田雑草と云われる種を含む分類群が出現しないことなどから水田の可能性は肯定も否定もしがたい。また、№5を除いては、浅間B軽石直下の水田面とされる試料とその上・下部層の試料とは花粉組成上大きな違いが認められず、ほぼ同じような環境であったものと考えられる。仮に水田であったとしたら、一つの可能性としては、現在のような集約的なものではなく、かなり粗放的な水田であったと考えられる。

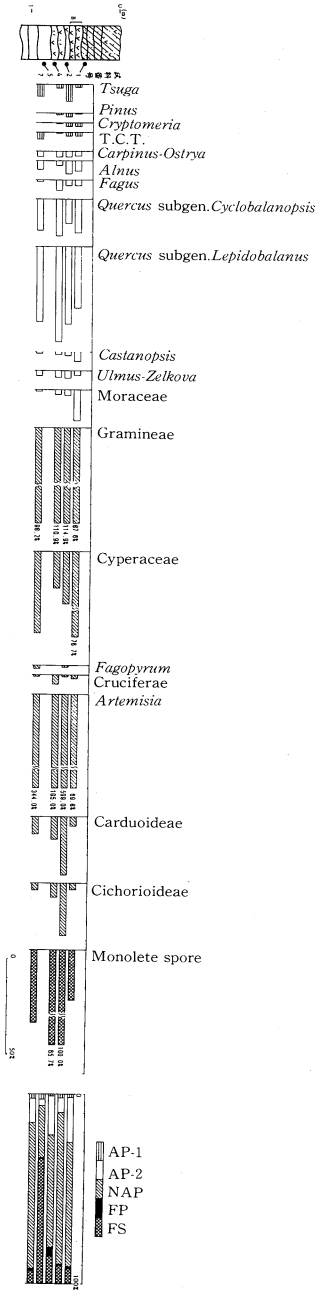


図２　中大門遺跡試料主要花粉・胞子化石ダイアグラム

表１　中大門遺跡試料花粉分析結果

花粉・胞子化石名 ＼ 試料番号	1	2	4	5	7
Abies		3	1	4	3
Tsuga	3	9	4	2	7
Pinus	1	2	2		
Sciadopitys	3	4	1		4
Cryptomeria	4	2	1		
T.C.T.	4	2	1	1	4
AP-1	15	22	10	7	18
Salix	1		1		
Pterocarya	1				1
Juglans			2		4
Carpinus-Ostrya	5	3	6	2	3
Corylus		1			
Betula	6		6		8
Alnus	11	7	5		5
Fagus	6	3	11		1
Quercus subgen.*Cyclobalanopsis*	36	13	39	2	18
Quercus subgen.*Lepidobalanus*	65	41	100	3	43
Castanea	2	2	1		
Castanopsis	10	2	3		1
Ulmus-Zelkova	5	4	7	1	3
Celtis-Aphananthe	1				1
Moraceae	33	3	5		1
Acer			3		2
Aesculus	1		1		
Vitis	2				
Elaeagnus	1				
Araliaceae	1		1		
AP-2	187	79	191	8	91
AP	202	101	201	15	109
Typha	5				
Sagittaria			1		
Gramineae	177	116	223	6	107
Cyperaceae	155	28	39	1	47
Polygonum sect.Persicaria					1
Fagopyrum		1			2
Chenopodiaceae	6	2	3		4
Caryophyllaceae			1		
Thalictrum	2	5	3		2
Ranunculaceae		1			
Cruciferae	4	1	10		1
Rosaceae	1				
Leguminosae		1			1
Geranium			9	7	
cf.*Euphorbia*		2	9		
Lythrum	1	1			
Haloragis	1				
Umbelliferae	6	3	1		2
Calystegia		1			
Galium-Rubia	1				
Artemisia	141	605	211	52	375
Carduoideae	10	31	24		10
Cichorioideae	7	28	15		4
NAP	517	826	549	66	556
Trizonoporate pollen	1		3	1	1
Trizonocolpate pollen	2		3		
Trizonocolporate pollen	6	6	37		8
FP	9	6	43	1	9
Lycopodium			1		
Polypodiaceae	3			1	1
Monolete spore	54	101	132	157	42
Trilete spore	7	2	3		7
FS	64	103	136	158	50
Total Number	792	1,036	929	240	724
Pseudoschizaea		7	4	110	
AP-1 (%)	1.9	2.1	1.1	2.9	2.5
AP-2 (%)	23.6	7.6	20.6	3.3	12.6
NAP (%)	65.3	79.8	59.1	27.5	76.8
FP (%)	1.1	0.6	4.6	0.4	1.2
FS (%)	8.1	9.9	14.6	65.9	6.9

図 版　　1

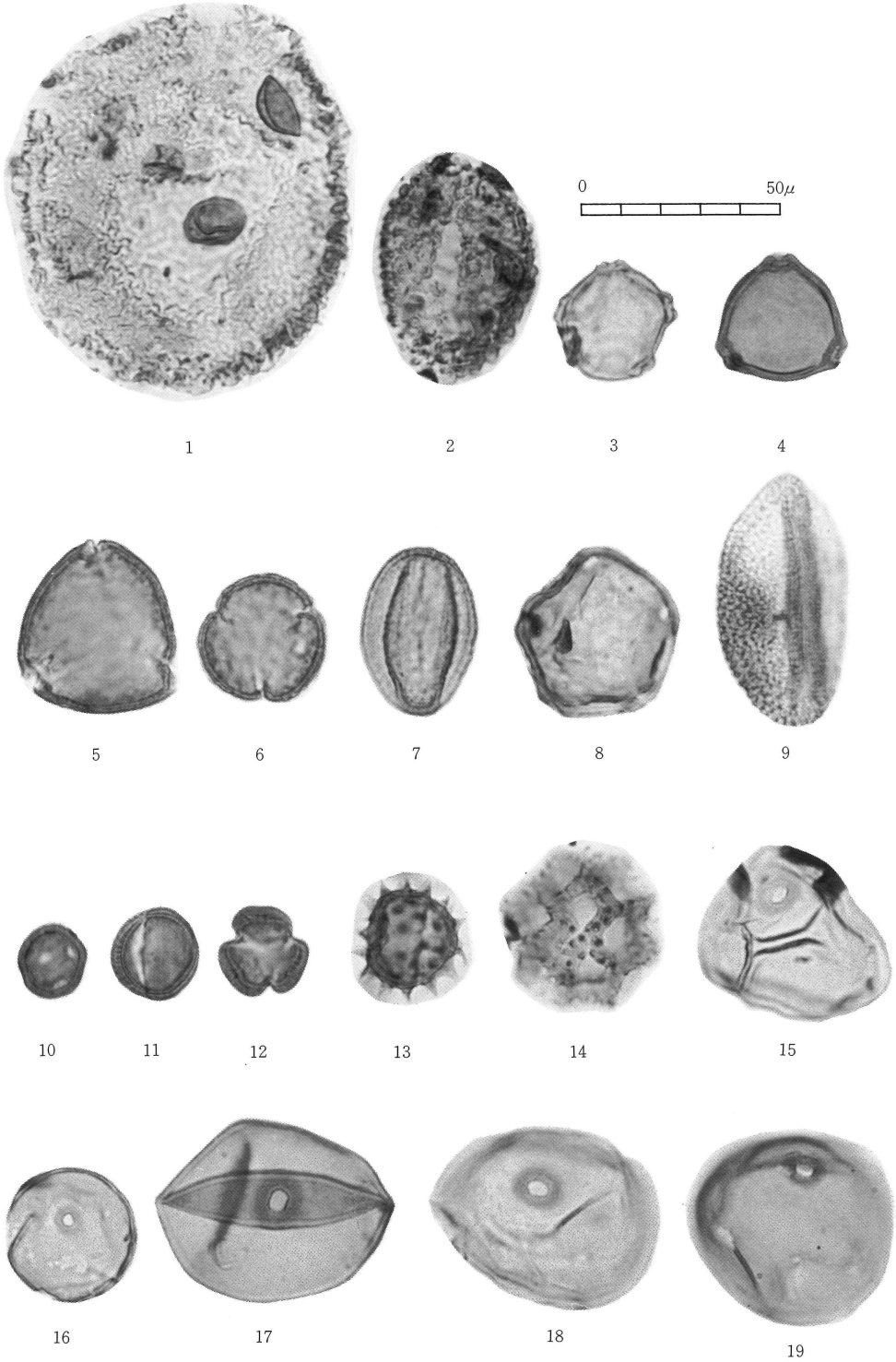
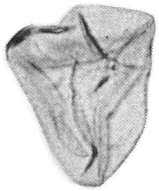
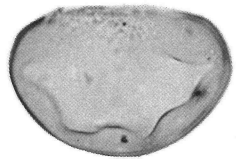


図 版　　2

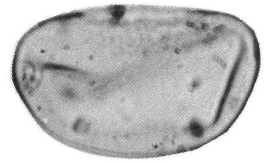


20

21



22



23

24

図 版 説 明

写真図版	花粉・胞子化石名	資料番号
	図 版　1	
1	*Tsuga*	4
2	*Sciadopitys*	2
3	*Almus*	7
4	*Betula*	1
5	*Fagus*	1
6	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1
7	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1
8	*Zelkova*	4
9	*Fagopyrum*	7
10	*Thalictrum*	2
11	*Artemisia*	4
12	*Artemisia*	1
13	Carduoideae except Artemisia	1
14	Cichoriodeae	1
15	Gramineae	2
16	Gramineae	2
17	Gramineae	4
18	Gramineae	1
19	Gramineae	1
	図 版　2	
20	Cyperaceae	7
21	Cyperaceae	1
22	Monolete spore	1
23	Monolete spore	5
24	Pseudoschizaea	5

X　結語――中大門遺跡発掘調査の成果と問題点

本発掘調査の結果、次のことが確認出来た。

(1)　水田址に関係する遺構として、畦畔が17本検出された。いずれも1108年（天仁元年）の浅間山の噴火に伴う、B軽石層にすっぽりと埋没していた。ちなみに、B軽石層の厚さは、約16～18cmである。

(2)　畦畔の大きさは、幅約92cm、水田面からの高さ約3.2cmである。

(3)　畦畔は東西方向のもの８本、南北方向のもの９本に大別出来る。しかし、調査面積の限定もあって、一区画当たりの水田面積の算定も一箇所しか出来なかった。

(4)　調査地を斜めに切るような形で、溝状遺構が１条検出された。水田面と同様、B軽石で埋まっていた。畦畔を切って走っており、水田址との関連は不明である。

(5)　調査地全域に亙って、扇形状の抉られたようなピットが多数検出された。一定のまとまりをもって、並行するものもあり、（C－12、H－12～C－15、H－15の区域）「耕作状遺構」と呼称した。大きさは一定していないが、長さ約25×15cm前後、最深部約10cm前後である。先端部は最も深く、徐々に傾斜状に浅くなっていく。形状等から推して、鉄製の農具による耕作痕と考えられる。

本発掘調査の成果は、古代の水田址の検出である。当地の北方約１kmの所には「市之坪」の字名が残っている。同地は上野国府推定地の東南に当たり、条里制施行の際に付与された序数の「一ノ坪」が変化したものと考えられている。本遺跡地の水田遺構が、条里制施行時のものとは一概に断定は出来ないが、B軽石下に埋没していたこと等を考え合わせると、条里水田がその施行時より連綿と続いて、本遺構に至った可能性が強い。本遺跡地周辺には、日高遺跡（高崎市日高町）、前箱田遺跡（前橋市前箱田町、57年発掘調査）、後閑II遺跡（前橋市後閑町、58年発掘調査）等、古代の水田耕作を実証する遺跡が散在する。又、花粉分析の結果報告や地質・土壌の鑑定により、同地が湿地帯だったことから、比較的粗放な水田耕作が行われたものと推定される。ただ、本調査は工場建設予定地部分という極めて限られた範囲内でのものであり、畦畔状遺構の方向性、水口の有無、面積の算定等、課題は残る。水田址の調査、研究は、近年、緒についた所であり、本調査報告書が、今後の同種の研究の叩き台の一つともなれば望外の喜びである。

大胡町文化財蔵書印

中大門遺跡

昭和59年3月24日　印刷
昭和59年3月31日　発行

編集者　前橋市教育委員会
　　社会教育課文化財保護係
発行者　明和ゴム工業株式会社
印刷所　朝日印刷工業株式会社